

○ 企画政策室長（齊藤）：定刻になりましたので、ただ今から令和4年度第1回小樽市人口対策会議を開催いたします。委員の皆様におかれましては、本会議の委員の就任についてご快諾いただきまして、また何かとご多用のところご出席いただきまして、誠にありがとうございます。本日17名の委員のうち副市長が空席のため欠員1名となっております。また欠席が、1名報告が現在ございまして、もう1名については連絡がないのですが、現時点では欠席2名という形になりまして、合計14名の出席となっております。会議はお手元の次第に沿って進めます。時間は概ね1時間半、終了時刻は11時半ごろを予定しておりますので、よろしくお願いいたします。

この小樽市人口対策会議は、第2期小樽市総合戦略の進捗管理が主たる目的となっております。小樽市で、最初の総合戦略は平成27年10月に策定いたしました。その後令和2年7月に改定いたしまして、第2期小樽市総合戦略がスタートいたしまして現在に至っております。市役所の外部の方の目線を取り入れまして進捗管理を行うために、皆様には委員をお願いしているところでございます。任期は現在の総合戦略の期間であります令和7年3月31日までとなっております。

続きまして、新たに委員になられた方もいらっしゃいますので、私の方で読み上げて紹介させていただきます。まずは、小樽商科大学の鈴木副学長です。最初の総合戦略の策定段階である平成26年度中から、小樽市人口対策会議の座長に就任いただいております。令和2年度の総合戦略の改定の際に改めて小樽市長から鈴木副学長を座長としてご指名させていただいております。本日の会議につきましても、後程の議事進行は座長にお願いしたいと考えております。次に窓側に座っていらっしゃる方からこちらの方でご紹介させていただきます。北海道財務局小樽出張所長の加藤委員です。（加藤委員：よろしくお願いいたします。）小樽公共職業安定所所長の小原委員です。（小原委員：小原です。どうぞよろしくお願いいたします。

す。)小樽商工会議所常議員の見延委員です。(見延委員：はい、見延です。どうぞよろしくお願ひします。)日本政策金融公庫小樽支店支店長の阿部委員です。(阿部委員：阿部でございます。よろしくお願ひします。)北洋銀行小樽中央支店、執行役員支店長の佐橋委員です。(佐橋委員：はい。佐橋でございます。よろしくお願ひします。)北海道銀行小樽支店支店長の栄森委員です。(栄森委員：栄森です。よろしくお願ひします。)子育て支援サークルホワイトウイング副代表の杉山委員です。(杉山委員：杉山と申します。よろしくお願ひいたします。)小樽市退職校長会会長の藤平委員です。(藤平委員：どうぞよろしくお願ひいたします。)小樽市総連合町会、常任理事・事務局長の藤井委員です。(藤井委員：藤井と言ひます。よろしくお願ひします。)連合北海道小樽地区連合会会長の佐々木委員です。(佐々木委員：佐々木でございます。よろしくお願ひいたします。)北海道新聞社小樽支社報道部長の佐藤委員です。(佐藤委員：はい、佐藤です。よろしくお願ひします。)市民公募の鈴木委員です。(鈴木委員：鈴木です。よろしくお願ひいたします。)市民公募の吉田委員です。(吉田委員：吉田です、よろしくお願ひします。)このほか北海道後志総合振興局地域創生部長の幾島委員、北海道中小企業家同友会しりべし小樽支部支部幹事の高橋委員、2名いらっしゃいますけれども、本日いらっしゃらないということで欠席という形になります。(※高橋委員はこの後10時10分頃、途中入室)はい。それではここからの議事進行につきまして鈴木座長よろしくお願ひいたします。

- **鈴木座長**：はい、座ったまま失礼いたします。ただいまご紹介いただきました、小樽商科大学の鈴木でございます。引き続き座長を拝命いたしましてもう10年近くになるんですけれども、その間ですね、市役所のいろいろな努力にも関わらず人口が2万人弱減っているという現実がございます。その背景にはいろいろ小樽ならではの問題・課題があるわけですが、その減少をですね、少しでも食いとめるべく、今回、委員の皆様方には、お知恵を拝

借したいと考えてございます。皆様よろしくお願ひいたします。はい。それでは、次第に沿って進めていくことにいたします。まず議事に入る前に、事務局から会議の進め方につきまして、皆様にお知らせがあると。ということですので、発言を許可したいと思います。よろしくお願ひいたします。

- **企画政策室長（齊藤）**：では私の方から、会議の進め方につきまして3点お知らせさせていただきます。まず1点目ですけれども、会議は従来に引き続き公開といたしまして、会議資料と会議概要は、小樽市ホームページ等で公表いたします。2点目といたしまして、本年度の会議は本日1回のみの予定でございますけれども、第2期総合戦略の見直しの必要性が生じた場合、令和5年度は複数回開催させていただく場合がございます。3点目といたしまして、委員の皆様からのご意見等は事務局が回答できるものは回答させていただき、庁内の会議等で検討が必要なものにつきましては、お時間をちょうだいして検討いたしまして、その結果を必要に応じて共有させていただきたいというふうに考えてございます。また本日お配りした資料の確認をさせていただきます。配布資料は、委員名簿と座席表のほか、次第と、資料1-1から資料の5-2までの一式となっております。資料番号と内容につきましては、次第の裏のページに記載されております。ご確認いただければと思います。現時点で資料の漏れ等お気づきの点はございませんでしょうか。また進める中で、資料の漏れ等ございましたらお声がけいただければと思いますのでよろしくお願ひいたします。事務局からは以上です。

- **鈴木座長**：はい。ただいま説明がありました、会議の進め方についてでございますけれども、これにつきましてご意見ご質問等はございますでしょうか。はい、ないようですのでそれでは、これについては事務局案の通りとしたらいいと思います。それでは続いて議事に移ります。議事のうち、第2期小樽市総合戦略の進捗状況についてでございます。まずは事務局か

ら説明をお願いいたします。

- **事務局（企画政策室：松尾主幹）**：それでは私の方から、第2期小樽市総合戦略の進捗状況についてご説明させていただきたいと思います。まず資料の1-1。昨年と同様の考え方なのですが、昨年は書面で開催をしておりますので、簡単に進捗状況の考え方について説明をさせていただきたいなと思います。第2期小樽総合戦略の進捗状況については、四つの基本目標に基本的方向と数値目標、具体的な施策と主な内容、重要業績評価指標、いわゆるKPIが定められております。この数値目標と、重要業績評価指標KPIについて、国の「まち・ひと・しごと創生総合戦略のKPIの検証について」の検証方法により、進捗状況の把握を行っております。第2期総合戦略の数値目標とKPIのほとんどにつきましては、本市の最上位計画で位置づける第7次小樽市総合計画と共有していることから、総合計画での指標の判定、施策の効果や妥当性、行政評価の結果をもとに、進捗状況の判定を行っております。具体的な指標の判定方法につきましては、下の表にあります通り、第2期総合戦略で目標に向け進捗しているもの、「①のA：目標数値を定めており現時点で目標を達成しているもの」、これについては第7次総合計画の評価で「指標の推移は順調」と評価されたもの。「①のB：数値目標を定めており、現時点で目標を達成していないもの」、これについては第7次小樽市総合計画の「指標の推移は順調でない」というものを置き換えて判定をしております。②③につきましても、「現時点では達成に向けた政策効果が必ずしも十分に発現していない」、これは総合計画では、「予算事業の内容の全面的な見直し」とされた事業です。その他につきましては、使用している統計上、実績値の把握が不可能なものについて、③と位置付けをしております。次の資料の1-2に移ります。それで実際、どのような状況になっているかという状況でございます。まず指標の推移につきましては、隔年で行う統計調査等の結果による資料等を除いてすべての指標で「目標に向け、進捗している」と判定をされ

ました。内全体の 32.1%の指標が、現時点で目標を達成しております。全 35 指標のうち、今回の確認対象につきましては 26 指標となっております。次のページめくります。2 ページ目から各指標ごとの数字 K P I の評価の進捗状況となっております。上の一番は、ナンバー1 ナンバー2 というのが数値目標の数値となっております。基本目標の 1 「小樽市に仕事をつくり、安心して働けるようにする」ということにつきましては、「雇用保険一般被保険者数」これについては「①の B」、「関係機関と連携した支援による新規創業者数」これについても「①の B」と進捗しております。次のページ、3 ページ目に行きまして、基本目標 2 「小樽市へ新しいひとの流れを作る」これの数値目標につきましては、「観光客の消費額」、これについては統計数値がありませんので「③」、「転出超過数」については 465 人で「①の A」という指標となっております。次のページ、基本目標の 3 「若い世代の妊娠・出産・子育ての希望をかなえる、未来の創り手を育む」、この「合計特殊出生率」については基準値 1.1 に対して令和 2 年が 1.1、令和 3 年の数値については、まだ出ておりませんので、「③」という形に評価をさせていただいております。5 ページ目、基本目標の 4 「誰もが活躍できる地域社会をつくり、安心な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する」、これについては「暮らしやすい環境が形成されていると感じている市民の割合」、これにつきましては「①の B」、「高齢者が元気に生き生きと暮らしていると感じている市民の割合」、これについても、28.8%、「①の B」という数値の評価となっております。総合戦略の進捗状況の説明については以上でございます。参考までに資料 3 として、総合計画の進捗状況及び行政評価の実施結果について検討しておりますので、後程ご覧いただければと思います。説明は以上です。

- **鈴木座長**：はい。ただいま説明のありました第 2 期小樽市総合戦略の進捗状況についてでございます。これにつきましてご意見ご質問等ございますでしょうか。

- **佐藤委員（北海道新聞社）**：北海道新聞の佐藤です。4 ページの基本目標 3 の一番上、合計特殊出生率なんですけども、下がってるんですね。で、うちでも報じましたけど、去年の出生数、初の 400 人割れ。などとなってまして、相変わらずですね、出生数がどんどん減ってるんですけど。この令和 6 年の目標値 1.27 というのは現時点でですね、達成可能な目標として考えていらっしゃるのかどうかっていうのをちょっと確認したかったです。
- **事務局（松尾主幹）**：出生率の推移につきましては、減ってるというのは全道的な傾向だというふうには感じております。達成できるのかできないのかっていうご質問に対しては、達成するように、今安心して産み育てる子育て環境の整備という形で今、事業を進めておりますので、あくまでもできるかできないかではなく、その達成に向けて、今子育て支援策の充実を図っていきたいと考えているところでございます。それで今回、出生率は全国平均と比べても北海道がさらに低い、そのさらに低い北海道の出生率からさらに小樽市というのは低い状態になっております。これについては、人口に占める若者の割合が低いこと、それと高齢者率が高い、というのがまず一つの要因かなと思ってます。本市独自の課題として、高齢化率が高くて子どもを産み育てる世代の人口が少ないこと、というのが要因の一つかなというふうにもまず考えております。あとそれと未婚化・晩婚化。有配偶出生率の低下の影響が大きいんじゃないかと今、今のところそういう分析をしているところでございます。以上でよろしいですか。
- **佐藤委員（北海道新聞社）**：はい、ありがとうございます。
- **鈴木座長**：小樽で今お子さん産めるところって、2ヶ所ですかね、協会病院とマタニティークリニックですか。あ、レディースクリニックですか。市内 2ヶ所ということで。私の子どもは 30 年前市立病院で生まれたんです。もう市立病院には産婦人科がないんですね。そして、改築改装したときも、やはり産婦人科がつかれなかった。なかなかこう生みにくいまちにな

ってきているな、という実感を私も持っていて、そういう意味でも出生率がなかなか頭打ちになってしまうというところがあるんじゃないかなと。しかしこれは医療状況の話なんで、市がどうこうするっていうことでなかなかできない部分が非常に悩ましい問題では、確かにあるかと思います。他にご質問等ございますか。はいどうぞ。

- **佐藤委員（北海道新聞社）**：5 ページ目の基本目標 4、もう 4 番目冬季間安全に移動できる道路が確保されていると感じる市民の割合というのが、10%近く、令和 3 年度は落ちてまして、大雪だったからってということもあるのかなと思ってんですけど、この数字をですね、市としては、どう受けとめているのかその一時的なものだと思ってらっしゃるのかというのをちょっとお尋ねしたかったです。
- **事務局（松尾主幹）**：今、ご発言があった点ですが、昨年とても豪雪で、除雪排雪が追いつかなかったっていう状況もあったかと思います。そういう結果を受けて、今回 18.4%っていう数字になっているのかなというふうに認識しております。先般も一晩でかなりの雪が降って大変だったことがあったんですが、今回の大雪につきましては昨年度の反省等々も踏まえて、担当の方で除排雪作業をしていただいたものと思っています。そんなに長期的に交通障害が出るようなことはなかったので、改めて令和 4 年度に数値をとったときには、このような落ち込みではないことを希望しているといえますか、ここまでの落ち込みはないのではないかなというふうに、現状では認識しております。
- **佐藤委員（北海道新聞社）**：わかりました。ありがとうございます。
- **鈴木座長**：現行の状況では、昨年と比べて除雪費っていうのはかかっているんですか、或いは軽減されてるのか。
- **事務局（松尾主幹）**：建設部の担当なんで、私ちょっと細かい数字までは持ってはきてはいないんですが。ちょっとその辺までは聞いておりません。

- **鈴木座長**：確かにちょっと雪が最近増えてきたなど。そういう感じはありますね。そういったところでこういった数字が出てきているのではないのかなと、思う次第でございます。あとはよろしいでしょうか。
- **杉山委員（ホワイトウイング）**：4 ページなんですけれども。「若い世代の妊娠・出産・子育ての希望をかなえる、未来の創り手を育む」というところで、先ほど佐藤委員からもご発言がありました。ご指摘があったように出生率は下がっているんですけれども。ほかの目標に対する達成度、2、3、4、5、6、いずれも「①A」で「達成している」、「現時点で目標を達成している」というふうになり、なっているのに、出生率には結びついていないというところで。この目標の上げ方をもうちょっと変えるというような、そういう考え方とかはないものなんでしょうか。達成しているのに出生率が下がっているというのは、このままでもう達成しちゃってこれでいいのかなってというような素人考えになってしまうんですけど。いかがでしょうか。
- **事務局（松尾主幹）**：3 番から 6 番の評価できる指標というところは、総合計画の指標を使っているんですが、出生率っていうものについては、子育て環境を充実することがまず一つと、先ほども言った通り人口構成ですとか、若年層が少ないとかっていう部分がありますので、まずは今安心して産み育てる環境、子育て政策の支援ということをやっています。その効果を図る上では、この数字で推移していますので、引き続き子育て支援策を続けていきたいなど思っております。これで達成していても、出生率が上がらないということであれば、国の方も今、さらに出生率を上げるために対策を考えているということですので、その対策を受けて、市でも実施できるような施策を検討していかなきゃならないなというふうに思っております。
- **事務局（斉藤室長）**：ちょっと私の方からも補足させていただきますけれども、特にこの 2

から6までの部分、総合計画の進捗状況ということで総合計画で定めた基準値に対してどうかという見方なんです、ご指摘の通り、達成はしているんですが、そもそもの目標値がちょっと低かったんじゃないかという部分はやはり議論がありますので、今後、総合計画、また行政評価も含めてなんですけれども見直しを考えておまして、その中でこの基準値、目標値が適正かどうかというのも、見直す予定がございますので、今の時点も含めて検討はしていきたいというふうに考えております。

○ **鈴木座長**：はい。どうぞ。

○ **高橋委員（中小企業家同友会）**：目標値の問題じゃないと思うんですよね。まず、なぜこういう状況になっているかという、項目が足りないんですよね。未来のつくり手を育むという目標、この6じゃなくて、もっと重要な7とか8とかがある可能性があるんですよ。例えば所得、若い夫婦世帯の所得がどうだとか、そういう分析をしないとならないんじゃないでしょうか。今度の市長の所信表明でもあるように、子育てに重点的に政策を打っていかなきゃならないのに、総合計画の項目だけで判断しちゃいけないんじゃないでしょうか。本当に真剣に考えていかないと。総合計画が全てじゃないですからね。何か足りないものがあるんじゃないですか。追加して考えていかないと、政策的に。やはり北海道の地方都市を見ても、子どもが増えている小さな市町村ってありますよね。そこは必ず所得が増えているんですよ、若い人たちも。だから子どもを産んで育てる環境づくりがね。出生率のほかはいって、そんなばかな話ないでしょ。先ほど杉山委員が言ったように、何か抜けてるんですよ。そこらへんは考えていないんですか。

○ **事務局（松尾主幹）**：必ずしもこの指標にない事業はやらないってということではないんです。

○ **高橋委員（中小企業家同友会）**：そういうことを言ってるんじゃないんです。その他にも何かあるでしょうということを僕は言ってるんです。それは何かって考えてますか。

- **事務局（松尾主幹）**：それは所得ですとか、働く場所です。今その対策は、企業誘致だとかそういったものも進めています。
- **高橋委員（中小企業家同友会）**：企業誘致なんて 100 年も前から言ってるんじゃないですか。そんなもの今更ね、人口減をね、企業誘致なんて。この外部でも何回も協議してますけれども、会社っていうのは損が出たらやっていけなくなっちゃうんですよ。それは小樽の歴史を見てわかるでしょ。繊維会社から飼料会社から。そんなありきたりなことじゃなくて、やはり他都市のことを勉強してですね。やはり参考になるのはどんどん入れていかないと。こんな会議やったって何もならないですよ。総合計画がうまくいったかいかないかじゃなくてね。現実を見てね、現実に合わせて政策を打っていかないと。何回こういうふうにやったって意味ないですよ。
- **鈴木座長**：これにつきましてはですね、小樽商大と小樽市が共同研究を 3 年前にやっております。それで、かなり学術的にも、それに近いものを出してはいるんですけども、そうなるんですね、やはり市民の所得水準が低いという、そういった結論に帰結するところがあるんですね。小樽と札幌の所得水準がやっぱり違うので、札幌で働いて札幌の会社に勤めた方が給料、そういった問題が厳然として存在していると。これはありまして、そこがまた子育てにも大きく影響して、生まれた子どもに対してはこのように小樽は、かなり頑張ってケアしてるということは、生まれてきた子どもに対してはあるんですけども、その生まれるまでの親世代の考えですよ、小樽で産むか、札幌に住んで札幌で産むかということになると、やっぱり札幌に住んでみたほうが、教育のその先、小樽よりも可能性があるという、そういうふうに考える親世代が多いと。ですから、星置なんかの人口が増えていくという。ほしみがあんまり発展しない、そういうところもあるんだと思います。で、私は小樽市の教育委員会の委員もやってるんですけども、教育委員会は本当に頑張ってると思います。

すね。コミュニティスクールとかですね、この辺は全部教育委員会の担当ということになっておりますので、ある程度の成果を見ているんですけども。その象徴である、小樽潮陵高校がありますけれども、あそこは半分ぐらいはもう小樽市内から来てないんですね。あそこの生徒は、余市とか岩内とか、ああいうところから小樽潮陵高校に半分ぐらい来て、小樽のさらに上の進学を目指す生徒たちは、札幌に行っちゃうんですよね。札幌の高校に行くという、そういった構図になっています。ですから、そういう意味でも 40 年前、50 年前とちょっと構造が変わってきているということがさらにさかのぼって、出生率にも影響してきているな、と私は見ておりますけれどもね。本当に構造的な問題になっているな、ということでもあります。はい他、いかがでしょうか。

- **阿部委員（政策金融公庫）**：すみません、ちょっと不勉強から来る純粋な質問ということでお受けとめいただきたいんですけど、基本目標 1 の 2 番ですね。「関係機関と連携した支援による新規創業者数」とありますけど、これはどうやって算出してるんでしょうか。
- （事務局、回答に手間取る）
- **佐藤委員（北海道新聞社）**：あとで教えていただいたらいいのでは。
- **阿部委員（政策金融公庫）**：後で教えていただければ。申し訳ないです。
- **鈴木座長**：市の関係機関ってということでしょうかね。
- **事務局（斉藤室長）**：申し訳ありません。何で把握しているか後程お知らせさせていただきたいと思います。申し訳ございません。
- **鈴木座長**：はい、他にございませんか。他になれば、次の議事に進みます。議事の（2）は、第 2 期小樽市総合戦略進捗管理のための市民アンケートについてでございます。ではこのアンケートについて、事務局より説明をお願いいたします。
- **事務局（松尾主幹）**：それでは資料の 2-1 の説明をさせていただきます。調査の目的につ

きましては、本市における人口減少、転出超過の状況を踏まえて、小樽市にお住まいの方々の公共サービスについての満足度、結婚や出産に対する考え方についてアンケート調査を実施しました。調査の対象地域としては小樽市全域、抽出の範囲としては令和4年5月末現在、小樽市内に在住の18歳以上、層化抽出法で行っております。調査期間については8月11日から8月31日まで、調査方法についてはインターネットフォームまたは郵送で行っております。全体の回答率については31%。年齢ごとの回答率については、18から29歳が10.6%、30歳から39歳が9%。40から49歳が12.3%、50から59歳が13.2%、60から69歳が19.4%、70歳以上が35.2%、不明が0.3という形になっております。年齢層ごとに均等に数字をとっているものですから、高齢者の方に行くに従って回答率が高い状況になっております。31%という数字全体で見ると、小樽市の取っているアンケートからいけば高い方の回答率にはなってるんですが、若者、特に若者世代、30歳以下の回答率が低いということもありますので、この会議の前段に市内でもこのアンケート調査について情報共有してるんですが、アンケートの取り方というのはもう少し工夫が必要じゃないかなということで考えているところでございます。答えの詳細につきましては事前に配布しておりますので、結婚に対する考え方、結婚していない理由、結婚するつもりはない理由、結婚してよかったことですか、理想とする子どもの人数だとかを、このとおり記載をしております。詳細については配布しておりますこの資料のとおりでございますので、説明については以上で終了させていただきます。よろしくお願いいたします。

- **鈴木座長**：はい。ということで、今回アンケートをとっているわけですがけれども。このアンケートにつきましてですね、質問ご意見等お伺いしたいと思います。何かございますでしょうか。
- **佐藤委員（北海道新聞社）**：よろしいですか。すいません。いや今ちょっとびっくりしたん

ですけど31%。ちょっと低いなと思って見てたら、あれですか、市のアンケートの中でもこれは高い方ですか。

- 事務局（松尾主幹）：30%以上いくと高いほうです。
- 佐藤委員（北海道新聞社）：大体何%ぐらいですか。
- 事務局（松尾主幹）：2割ぐらいですね。
- 鈴木座長：不特定多数にアンケートすると、このぐらいの数字は高い方になりますね。
- 佐藤委員（北海道新聞社）：ただ、今課題とおっしゃいましたけど、やっぱりあれですよ、年齢層で30人に満たない回答で、いろいろ分析するのって根拠としてどうなのかなと、どうしても思ってしまいますよね。そこは課題として感じていらっしゃるということなんで、ぜひ改善していただきたいと思います。
- 鈴木座長：発送数をふやせば、回答数も増えるということにはなるかと思います。やっぱりネットで回答するのは若年層が多いということですね。
- 吉田委員（市民公募）：理想とする子どもの人数という左下のところで、2人っていうのが1位で3人と合わせると圧倒的に多い。すごい皆さん子どもを希望してるんだなとびっくりしたんですが、実際小樽市でお子さんを持つ家庭で、お子さんが2人とか3人ってどれぐらいいらっしゃるのか、おわかりでしたら。
- 事務局（松尾主幹）：その資料今持ち合わせてないので、後程。
- 吉田委員（市民公募）：はい。出生率が低いっていうところもあるんですが、やっぱりその2人3人お子さんを望んでる方が多いっていうことで、そこを充実させることも大事かと思いました。
- 鈴木座長：3人が意外と多いというか、しかし周りを見渡してもなかなか3人という家庭はいないんじゃないかな、という気はしておりますけどね。1人というのは、実はかなり少な

い。一人っ子っていうのは皆さん望んでいないということでよくわかるんですけど、現実として、一人っ子が多いということになってますよね。これはちょっとギャップがあるなという感じはいたします。他にいかがでしょう。

- **佐藤委員（北海道新聞社）**：個別回答も含めて、今議事の対象ですよ。個別回答いろいろ見せていただいて、やっぱり除排雪に対する不満がすごく強いんだなと思いました。私も去年の7月に小樽に来て、この冬暮らしてますけど。坂のまちなのに歩道がなんかすごいことになってて。車道は一生懸命頑張ってやってらっしゃると思うんですけど。堺町通り観光客がたくさんあるところなんか本当にすごいことになっていて、そこを外国人がベビーカーを押しながら行ったりとかして。個別回答の中にもありましたよね、近所の方々が、除雪がこのままだと今後住んでいけないので引っ越していった、と。すごく深刻な声が上がっているんで、これはやっぱり何か力を入れて、今力を入れていないとは言わないですけども、何か考えたほうがいいのか、と。それともう一つバスの減便ですよ。これも街で何かお酒飲んでたりすると、結構家に帰るのにも、1時間にもうバスが1本か2本しかないから、本当困ってますみたいな声を聞くので。これもですね、うちのデータベースをひっくり返したら、去年の4月ですか、中央バスさんが結構減便したなんて記事も出てきていて。これも市としてやっぱり、やってらっしゃるのかもしれませんが、バス会社さんときちんと話し合ってますね、やっていかなきゃいけない課題なのかなと、このアンケートの個別回答を見ていて感じました。

- **事務局（松尾主幹）**：回答についてはうちできないので、除雪の担当と交通の担当から改めてさせていただきたいなと思います。

- **鈴木座長**：除雪はね、予算の問題が密接に絡んできますから。すぐ改善っていうのはなかなか難しい。またお天気次第という、そういったところもありますので、非常に難しい問題だ

なあというふうに考えますけれども。小樽の場合、バスの問題が絡みますけれども、路線バスなんか、私は緑町ですけれども、除雪が行き届かないので路線変えるっていう場合もあるんですよね、冬になると。もうバスが通れなくなるっていう。第2大通りとか、大雪のときは通らなくて、そういうことがございます。ですから、あそこら辺、最近J Rは計画的に運休も始めましたけれども、さすがに計画的にそういうことをやるというわけにもいかないんじゃないかなと思いますので。そこら辺、バス会社とやっぱり密接に連絡取っていかなくちゃいけないんじゃないかなと思いますね。小樽商大の例を挙げますと、一昨年からコロナでほとんど授業がオンラインになって、学生が学校に来なかったんですけれども、そのとき学生1人ぐらい乗せてバスが来たんですよ。バスだけこうずっと平常運行してたっていうのがありまして。そこら辺は効率的なバスの配置というのができていたのかなあという、そんな気も実はしておりました。

- **佐橋委員（北洋銀行）**：ちょっとよろしいですか。このアンケートを見ての感想なので、質問ではないので、感想だと思って聞いていただきたいし、私の肌感覚っていうのもあるんですけども、私どもの職員も今65名ぐらい支店にいるんですけども、15名ぐらいは札幌から通っています。でも、逆に札幌の方の人たちで、小樽から札幌に通って来てるんだっていう人は、ほとんど聞かないというのが正直なところですね。でも、札幌から通って来てるってことは通勤圏なわけであって、小樽に住んで札幌に通う、小樽に働くことを増やすっていうのも大事かもしれないですけども、札幌に働く人が小樽に住むっていうことに目を向けるっていうのも一つかな、とは思っています。同じ市役所さんの別の会議のときも言ったんですけども、札幌と近いっていうのが、強みでもあり弱みでもあるっていうのは、小樽市の特徴だと思うので。そこを強みにするために、アンケートを見ると、子育てには公園だとか保育園だとかっていうことが思いつきがちかもしれないですけど。アンケートを見ると意外

とどの世代でも、やっぱり今言った除雪とか、交通、ここが大事なんだなっていうのが感じられました。ここをしっかりと整備できて、札幌との交通も良くすれば、小樽ってやっぱり魅力的なまちなので、小樽に住んで札幌に通うっていう、今の札幌に住んで小樽に通うという逆のパターンの人たちも増えてくるのかなっていうふうに思って、読んでました。ちょっと本当に感想なのでお答えがなくて結構なんですけど。そういうふうに思っています。

- **鈴木座長**：これは小樽の人口対策、長年の課題っていうんですか、どのような路線をとるべきか、それで、以前から、人口対策に関しては雇用を増やすということで企業を誘致して、これはずっと前からございます。それで、小樽で独立した産業圏を形成するっていうそういう考えが前からあったんですけれども。もう一つは当然ベッドタウン化っていうことですね。これは路線が違いますので、小樽としても明確な方針を出しにくいところがあったということがあるんです。それでベッドタウン化するのであれば、最大の条件というのは家賃が安くなければ、ということなんですよね。ですから、江別や石狩や北広島と小樽が比較された場合に、家賃がどうしても小樽が高いというところがあって、住むとしたらそっちの方に、札幌に通うのであれば、そちらに住んでしまうといった事情があったんじゃないかなと思いますね。ですから、小樽ってのは、文化的にはもう札幌と対抗できるぐらいの文化を持っている形ではあるんですけれども、そういう意味で逆に言うとそこがまたベッドタウン化を阻んでいるという。そういったことも言えるんじゃないのかなと、思いますね。他はいかがでしょう。よろしいですか。それでは次の議論を進めたいと思います。次は令和4年度に実施した移住支援策についてでございます。ではこの支援策につきまして、事務局より説明をお願いいたします。

- **事務局（松尾主幹）**：令和4年度に実施した支援策についてということでご説明をさせていただきます。まず一つ目といたしまして移住情報サイト「笑になるおた

る」というものを開設しております。住まい、仕事、子育て教育、暮らしの情報、移住前後に必要な情報が多岐に渡るんですが、これらを小樽市のホームページから個別に探し出すことは大変手間がかかるということで、カテゴリーごとに情報をまとめたサイトを作成したところでございます。今年度作成したばかりでまだ内容の充実っていうのは日々図っているところでございます。特に住まいの関係ですとか仕事の関係については、今後充実をしていかなければならないと考えております。次に移住者ミーティングの開催ということで、すでに小樽市に移住した方々のコミュニティの形成のきっかけとするため、移住者ミーティングを10月22日に開催いたしました。8組9名の方に参加をしていただき、参加者の感想としては「コロナの影響で移住後の交流ができなかった」ですとか、「対面で開催できてよかった」ですとか、小樽については、「よそ者を受け付けない閉鎖的なところがある」「すでにあるコミュニティにはなかなか入っていけない」「移住者同士のコミュニティが欲しい」という意見がありました。こういったご意見を受けて、移住者同士のコミュニティの形成というのは来年度に向けて、引き続き取り組みをしていかなきゃならないなというふうに考えております。次のページに移りまして、3番目、移住体験オンラインミーティングの開催ということで、令和2年度、3年度については、オンラインで移住体験ツアーとして開催しております。令和4年度は行政からいろいろな施策を説明するのではなく、先輩移住者との交流をメインという形にして、小樽の今を中継したような形でございます。参加者については10組14名でございました。今、感想のアンケートをまとめているんですが、3回目となったこともありまして、なかなか好評を得ている状況でございます。4番目につきましては、「おたる移住・起業ひと旗サポートセンター」というものを開設いたしました。従来、創業ワンストップ窓口というのを商工会議所の方にありました。それと一般の移住の相談窓口っていうのは市役所の中の企画政策室に置いておりました。これを一つにまとめまして、「お

たる移住・起業ひと旗サポートセンター」というものを開設いたしました。この中で重点的に取り組んでいるものというのが、無料職業紹介事業というものを厚生労働大臣に届け出を行いまして、移住相談の中で、市内での求人情報をに関する相談をしていこうということを主に目標として、新たな機能として追加をして、一元化を図ったところでございます。参考までに新聞2社の記事と開設のチラシをつけておりますので、後程ご覧いただければと思います。説明については以上でございます。

- **鈴木座長**：はい。ただいま説明のあった、令和4年度に実施した移住支援策についてでございますが、これにつきましてご意見ご質問等がございますでしょうか。はいどうぞ。
- **藤井委員（総連合町会）**：総連合町会の藤井と申します。この移住情報サイト、ちらっと見させてもらいました。おしゃれっていうか、堅苦しくないっていうか、自然と観光サイトを見ているような感じでいざなう形で上手くできているというのが第一印象です。やっぱりこういうものを基軸にしてやっていくということですね、今頃か、という意見もあるかもしれませんが、やはりこういうのができたことは非常によかったなと思っています。移住者ミーティング、コロナ禍という状況の中でオンラインという形は、取り組みとしては非常によかったのかなと思います。こういう実際に移住して、長年住んでいらっしゃる方々にはいろんな課題があるし、本当に良ければ、だとちょっと語弊ありますけども、あなたも来ませんか、と。お店に行ってみて、美味しい店であれば、今度行ってみませんか、っていうのと同じように、小樽に住んでよければ、そういう形で声をかけるということになるでしょうから。何かこの移住者ミーティングとかオンラインイベントの中で、新しい事業の展開のヒントみたいなものが掴めるような気がします。行政が事業展開するよりも、実際に移住して来た方からの発信の方が新たな事業展開だし、今やっている事業をちょっと見直すっていうきっかけになっていくと思って。ここに書いてある「移住者同士のコミュニティ」とか「閉鎖的」

とかいろいろありますが、それを越えた先の部分を引っ張り出すというか。議論の中から引っ張り出していくってことをやっていけば、何か見えてくるし、ここの伸びしろを伸ばしていくしかないなと思うんですよね。あともう一つ、これは日本人対象ですが、外国人に対してはできないのかなと思います。日本の人口が減ってるから、小樽が増えてもよその地域が減ることになるので、単なるパイの奪い合いという話になってしまうので。外国の、例えばフランスなどでも、人口が増えているところって移民なんですよ。だからと言って外国人を積極的に受け入れることについては議論もあるかと思いますが、短期移住などいろいろありますよね。だから、中国の方とか台湾の方なんかも、子ども以上に親の方が雪を見て遊んでいるくらいですから、逆にその厳しい冬の小樽を楽しむツアーみたいな企画だとか。3ヶ月間ぐらい、例えば12月から3月くらいまでのツアーにして、ホテルでもいいので実際に滞在してみてくださいというような。短期移住みたいな形で外国の方を呼ぶという仕掛けもしていかないと。日本人だけ対象にしても頭打ちと言いますか、そんな気もしています。外国の方はスマホの活用などにも長けているので、新たな友達を広めてください、といろんなところに情報提供してみるなど。簡単に言うと食べログの移住版みたいなことですね。食べ物とか、そういう人間の根本的なものや、住んだ後の生活のことなどをもう少し考えて事業を実施していくといいのかなと思いました。

- **鈴木座長**：はいありがとうございます。さっきも言いましたように、小樽ってのは独自に文化圏を構成しているんで、移住者ミーティングの感想で「よそ者を受け付けない閉鎖的なところがある」というのは、確かにそういうところはあるかなと。
- **藤井委員（総連合町会）**：だけどあなたの町にもそういうところがあったから、移住して来たのでは、という気がしますよね。
- **鈴木座長**：北海道で、人口増やしている稀な自治体で東川っていうのがありますけれども、

もう本当に無色透明な町、というんですかね。そんな感じで、来るものは全く拒まずという、そういった雰囲気は確かにあそこにはありますよね。或いは、この間ニセコにちょっと行って懇談してきたんですけれども、ニセコは空き家が足りないって言ってるんですよね。小樽と全く逆な状況になっていて。ですから、ニセコは今言われたように、外国人もものすごく多くなって、まさに外国人の人口が増えている地域なわけです。ニセコ町が別に頑張ってるわけではないんですけれども、あれはスキー場があるから集まってくる。そういう感じなんですよね、実際に。ですから、この町の努力っていうのはどのぐらい反映するか、東川はかなり努力してるんだらうなというのが見えております、実際に。ですから、何をするにしてもやっぱり財源が必要になるのかなということがありますけれども。ふるさと納税制度なんか小樽はどのぐらいなのでしょうね。

- **事務局（斉藤室長）**：確か6億ぐらいだったと思います。また、今どんどん伸びてきておりますので、さらに、上乘せされるかなというところです。
- **鈴木座長**：返礼品はどんなものを出されていますか。小樽だったら魅力ある返礼品、いくらでもあるのでは。
- **佐藤委員（北海道新聞社）**：スイーツとかワインとかじゃなかったですか。
- **事務局（斉藤室長）**：はい、それから水産加工物とか。
- **鈴木座長**：そうですね。そこら辺ですよね。
- **藤井委員（総連合町会）**：根室のカニとか、みんなが食いつくガツンとしたやつはないんですよね。
- **事務局（斉藤室長）**：一番は農産物だったり、水産のナマモノなんですけど。
- **藤井委員（総連合町会）**：各種メニューはあるけれども、日本人が大好きな感じだとかああいうガツンとしたのはない。ふるさと納税っていうのは、先生おっしゃったように、もっと

もっと伸ばす素地はあるんじゃないかなと。その割にはあんまりアグレッシブな姿を見せているようには感じないですよ。税収の増える要素もそこしかないかなと思うので、そこは移住者の方の視点でも何かできるんじゃないかなと。もっとこういう方、移住して来た方の目線での事業展開ってのは、もっとあるんじゃないかなというふうに思いますね。

- **鈴木座長**：はい、ほかにありますか。
- **杉山委員（ホワイトウイング）**：移住者ミーティングの内容についてはまだ今まとめてらっしゃるところだっていう話でしたけれども。この実際もう移住してきた方が小樽に何を一番求めて、何を魅力として来られたのかっていうことを、もしわかったら伺いたいです。
- **事務局（松尾主幹）**：あのですね。実は吉田さん（委員の吉田さん）。移住されてきて何回もご協力いただいているんですが、移住オンラインミーティングの方は、小樽に移住してくるにあたって、雪はどうですかとか仕事はありますか、暮らしぶりはどうですか、っていう質問に先輩の移住者の方が答えてくれるので、小樽を検討する際の疑問に答えますっていうものが多かったです。オンラインの移住者ミーティングについては、なぜ小樽に来たかですとか小樽に来ての感想というのもいろいろいただき、ちょっと今日は手元に持ってきてないんですけども、いただきました。今回、移住者ミーティングについてもオンラインミーティングについても、初めて聞くような意見が正直多かったです。なぜかっていうと、一切私たち（市職員）参加しませんでした。どうしても行政の職員が参加すると、要望会みたいな形になってなかなか言いづらいからっていうことがあったので、今回についてはFMノースウェーブのDJの朝ラジオやってる方に司会進行をお願いして、意見を引き出してもらおうという形をとりました。そうしたら、思っていたようなアンケート調査みたいな、今までの要望とかがあっていうような形じゃなくて本当に生の声が聞けてよかったなと思ってる部分があって、それを今まとめて、来年度以降、形にしていきたいなというふうに思っています。

- **吉田委員（市民公募）**：はい、吉田です。先輩移住者としてこの両方のイベントに参加させていただいたんですけど。先輩移住者としての質問に回答するっていうのをさせていただいて、その際に資料を拝見したんですけど、移住を希望して参加されてる方にとって、小樽のどこが魅力的かっていうところでは、やっぱりレトロなノスタルジックな町並みに魅力を感じて、小樽に来た、ということがあって、そういうところに魅力を感じて移住を考えているっていう部分が多かったですね。Uターンっていう方もちょっといたかなぐらいで、ほぼそういう観光地として来て街並みに魅力を感じたっていう。なのであとは仕事と住むところと雪の問題をクリアしたいっていう方が多かったです。
- **鈴木座長**：吉田さんもやっぱりそこに魅力を感じて。
- **吉田委員（市民公募）**：そうですね、歴史のあるまちで。私はもともと地元が札幌なんですけど、なるべく札幌に近いところでちょっと自然の多いところに移住したいなと思って。
- **鈴木座長**：札幌ではなくて。
- **吉田委員（市民公募）**：はい、札幌ではなくて。でもやっぱり札幌に実家もあるし、便利だしってところがあるんですけど、先ほど出た江別とかよりは、こういう歴史ある古い町、夫婦ともに興味、関心があったので、小樽に決めた、ということですね。なんで、いろいろと語り始めたらいろいろとあるんですけど。個人的に、移住してきてすごく思ったのが、小樽は札幌の隣町だと思ったんですけど、
- **鈴木座長**：移住してきたのは札幌からですか。道外ではない。
- **吉田委員（市民公募）**：そうです。道外ではなくて札幌からです。東京にも10年間住んでいたんですが、そこから札幌に戻ってきて2年ぐらい住んだ後に小樽に移住したんですけど。小樽って後志なんだなっていうことを、こちらに引っ越して初めて実感したんですよ。地元札幌で生まれたときは、札幌の隣の町だとしか思ってなかったんですけど、何ていうのか

な、後志の人たちの一番中心の大きい町みたいな、全くそういう認識がなかったので、何かそれがすごいびっくりしました。余市とか仁木とか倶知安とか、そういう人たちが来る場所だな、という。病院とかもそうですし、それが特別思った感想です。はい。

- **杉山委員（ホワイトウイング）**：実は私は道外からなんです。もう、もうここの暮らしが一番長くなっちゃいましたけど、それはたまたま夫が小樽の出身で、私もここに来る前は東京だったんですけど、たまたまそこで出会って、夫が小樽に戻りたい、と。そのときはもう夫はすごく、小樽に思い入れがあったんです。なんていうか、小樽にどうしても住みたい、小樽が好き、っていう。年代的なこともあるんでしょうか。今は50代後半なんですけど。何かそういう自分のまちを愛する人が多いんだなっていうのはすごく思ってるんですけど。私は仕方なくとは言いませんが、普通に何の考えもなく、もうフラットな感じで小樽に来たんですけど。雪、多いですね。最初の頃はもう雪多くて。二、三年は楽しいなと思って雪かきしてましたけど、そのあとはもう懲り懲りだっと思うぐらいだったんですけど。でも私は今もうここが一番長くなって、自分のふるさとだと思ってます。小樽本当に好きですし、小樽を良くしたい。人口も、できればこれ以上増えてとは言わないけど減らないで欲しいなっていうふうには思ってるんですけども。でも、何ていうのかな、小樽の人たち、ここで生まれて暮らしてる人たちは、どこまで来自分たちのまちの魅力に気づいてるんだろうとか。ここをどうしていきたいって思ってるんだろうっていうのは、ここの会議じゃなくてほかのところにも出席させていただいても、いつも思ってしまうことなんです。ごめんなさい、すごく取り留めない話で感想なんですけれども。もっと本当の小樽の内なる熱みみたいなものが欲しいなっていうのもすごく思ってます。すいません。取り留めのない感想です。

- **鈴木座長**：いや、小樽に対してはシンパシーを感じる方は非常に多くて、小樽愛の強い方は他の町と比べてもパーセンテージは、人口に対して高いのではないかなと思います。ですか

ら小樽を本当に愛してくれる人ってのは、やっぱり厳然と存在すると思うんですけども。全国アンケートで人気のあるまち、或いは住みたいまち、行ってみたいまちっていうことになると小樽は必ずベストテンに入るわけですよ。それぐらい知名度のある、観光地として有名で、でも同時にいつも入ってくる小樽のライバルっていいですか、それが函館。函館も人口減にすごく悩んでるんですよ。毎年小樽の倍ぐらい人口は減ってるんですよ。ですから、いわゆる観光とか文化とか、そういうところですね、人口減を食いとめるっていうのは限界があるのかなと。結局、人口減というのを緩和させるには、あんまり住むところにはこだわらないんだけど、客観的に見て得なところがいいなという、そういったあんまり熱意のない人っていうかですね、そういう人たちをより集めるような、まちづくりをしていくっていうのが、一番人口減を緩和するには役立つのではないかというふうに、私は考えておりますね。ですから小樽の応援団というのは本当にいっぱいいますね。私の息子も小樽で生まれ育ってですね、今は東京で働いてますけれども、本当は小樽に帰って来たいんですよ。帰ってきたいんだけど、収入がぐんと減るんでやっぱり東京に住むしか今はないなあ、という感じで、時々小樽に帰ってきたいと、石原裕次郎みたいなことを言うんですよ。ですから、そういう生き方っていうのを結構小樽の人は、持っているんじゃないのかな。

- **藤井委員（総連合町会）**：ちょっと仕事に関連して思ったのですが、小樽で働き場所を探しても、なかなかないと思うんですよ。観光のまちってのはやっぱり水商売だから、いいときはいいけど悪いときは悪いし、安定的な収入を得られる職場と言ったら、なかなか難しい面もあると思います。だから移住してきてもらう人は小樽で起業する、自分で起業する、そういう心構えの人でないと難しい面もあるのかなと。だから、市が譲り受けた第3倉庫とかは例えばコワーキングスペースにして、観光地のど真ん中で働いて、しかもネットで世界中

に商売ができますよ、と。働き方によっては非常に価値ある場所だと思うんですよね。そういう起業の人を呼び込むような取組をすれば、その人たちは若い世代が多いから、子育て世代だろうから、子どもを産み育てるっていうことになるんじゃないかと。その次の世代も小樽で暮らすということにつなげたいので、若い世代を呼ぶとなると今みたいな考え方にも注力するというか、集中してみてもいいのかな、と。だからその第3倉庫というのは、運河の目の前なんだから、極端に言えば改修費用に何千万かかったとしても、コワーキングスペースにして安く貸すと。それから安く貸す代わりに、小樽の子どもたちのIT教育の講座をただでやってもらうとか、500円でやってもらうとか。親子で受けられる教室などがあれば、来てくれるのでは。それに日本人だけを対象にするのではなくて、世界中から、例えばアメリカ人や中国人や台湾人が来てくれるのもいいと思います。それぐらいの視野でやっていかないといけないのでは。このKPIはあんまり、無理して作ったのはわかるので仕方ないけど、そこを否定をする気はないけど、このKPIを100%やっても人口が増えるとは思えないんですよね。今言ったように、移住してきた人も含めて世界中の知恵を集めてやって、小樽の維持を考えるクラウドシステムみたいなものを作ってですね、そこでいろんなことをやっていくと。後でデジタル田園都市国家構想も出てくるので言いますが、こういうところで補助金ひねり出せるんじゃないかな、と僕は勝手に思ってます。小樽でデジタル田園都市として、人口や移住に関する魅力的な企画を出せば、デジタルの方の補助金なども引っ張れるし、それぐらいの気持ちじゃないと難しいのかなと思います。これは頑張っただけで欲しいなと思いました。以上です。

○ **鈴木座長**：はい。どうぞ。

○ **藤平委員（退職校長会）**：はい。感想になりますけども。例えば、こういう記事ですとか、こういう資料も見ました。小樽市が積極的に発信しだしたなという感じがします。やはり東

川町もよく出てきますが、以前からアピールをされていて、全道の皆さんも東川と言ったら人口が増えてるんだ、という認識かと思いますね。そういうのを私もずっと見ていて、今回こういう資料や新聞の記事を見て、小樽もやりだしたな、という意欲を私は感じるんです。やっぱりこういう情報がどんどん発信されていることについて、年齢関係なく、ああよかったな、と思いますよね。市長の顔が見えますよね。そういった点でよかったなということが第一の感想です。それともう一つですね、私は仁木町出身で小樽に住んでおりますが、仁木町の良さも知っています。それは例えば、高齢者支援、それから子育て支援について、どうしても仁木と小樽を比較してしまうんですよね。自分の子どもは小樽で育っています。そういう点では、今総合的にやっていることが全体をすごく押し上げていくんじゃないかなと思います。今藤井さんがおっしゃったこと、これもすごく大事なことですし、それから後志から見ると小樽はやっぱり、札幌の手前の大きな大都市です。買い物とかその他の生活に関しても、小樽を頼りにしているのが実態だと思います。特に、地方にはスーパーですとか、いろんな店がだんだんなくなってきますね。そういう中で、余市から小樽、仁木から小樽ということで、後志管内は小樽に頼っているのが実態です。子育ても含めて視野を広げていくと、小樽だけでなく、後志からも頼りにされているという面があります。そういうことを私は感じます。まずは、いろんなことをアピールをしていくことが一番かなと思います。以上です。

- **柴森委員（北海道銀行）**：すいません、私もちょっと感想です。私は転勤族なもんですから、以前私、苫小牧に勤務したことがありまして、苫小牧って千歳側からずっと 36 号線を行って登別側まで確か 30 数キロあったと思うんですけど。あそこはもう完全に駅あたりからいわゆる西側というかですね、登別側が古い住宅街になっていて、反対側の千歳側の方が植苗とかそういう名前の地域なんですけども、向こうがもうバンバン家建ってるんですよ。住

宅もどんどん若い世代が来てるっていう、もう完全に二極化してる町なんですけど。当時、何でそんなに増えてるのかなって。やっぱり苫東地域があってですね、ご存知の方多いと思うんですけど。トヨタがあつたりアイシンがあつたり、働くところがすごくたくさんあって、そこにどんどん人が、若い世代が増えてきていると。だから、朝ちょうど5時ぐらいですかね、あと夕方とですね、あそこの4車線道路が結構なラッシュの状態になるんですね。渋滞したりとかですね。そんな独特の光景があつたりして。今いろいろ移住のお話とか、働く場所のお話がたくさん出てましたけど。やっぱりそういう（働く）ところがあればまた、若い世代が来るのかなということ、非常に大切だなって。ちょっとすいません感想ですが、そう思いました。はい。以上です。

- **鈴木座長**：千歳も確かに人口あんまり流出がない、かえって増える。そういうところですかね。今千歳の人口は小樽の次に来ていてですね。確か小樽が北海道で9番目、それから千歳が10番目、8番目が北見でしたかね。ですから、千歳にも抜かれる時が来るのかなという、そんな気がします。今、産業もありますし、千歳には自衛隊がいるという、そういった大きなものがあります。退役自衛官は千歳にかなり住んで、そのまま残っていくと。そういったものがあるんだと思います。他に何かございますか。
- **阿部委員（政策金融公庫）**：これも質問になりますけれども、この「笑になるおたる」ですね、これ小樽への移住を考えてる人に対しては非常に有効な情報提供ツールだと思うんですけども。そもそも小樽に行こうかどうかっていう前に、移住したいんだけどもっていうモヤモヤとした気持ちを持ってる人たちですね。そういう人たちに対して何かこの小樽の移住をPRする取り組みということでやってらっしゃらないですか。
- **事務局（松尾主幹）**：移住をモヤモヤッと考える方っていうのは、北海道移住と考えると、北海道全体の移住フェアに参加してみたりですとか。あとは移住の協議会があって、そのの

「北海道で暮らそう」というホームページがあるので、そういうところから大体入ってきて情報を入手されているようです。そこにはもちろん小樽も参加してるので、そこからこのサイトに見に来て、ということ想定しています。

- **事務局（斉藤室長）**：本州で開催される移住フェアなどにも参加しています。
- **阿部委員（政策金融公庫）**：そういうやはりどんどん小樽を売り込むという取り組みが必要だと思いますのでそういった分野でも力を入れていただけたらと思います。
- **鈴木座長**：本州の移住フェアっていうと、年に何回ぐらいあるんですか。
- **事務局（松尾主幹）**：今小樽が参加してるのは年2回です。東京で。
- **鈴木座長**：どのぐらい集まるんですか。自治体は何自治体ぐらいですか。
- **事務局（松尾主幹）**：自治体は北海道中、かなりの数の自治体が北海道中から集まって北海道の移住フェアを開催しています。そのブースに出展すると、人気があるのは小樽です。
- **鈴木座長**：やはり知名度が全然違うんでしょうね。小樽が一番集まりますか。
- **事務局（松尾主幹）**：小樽市が一番・・・まではちょっといかないと思うんですけど。
- **藤井委員（総連合町会）**：すごくたくさん人は来ますよ。だけど「毎年人口減ってるんです」と説明するとみんなきょとんとして、本当？なんで人口が減るんですか？って言われますよね。それは私が聞きたいくらいなんですけど、なんて話もしますけど。そのギャップがすごいです。
- **阿部委員（政策金融公庫）**：それだけ人気があるんだったら小樽だけでやっても非常に面白いのでは。私は単身赴任者ですが、私の地元でもやっぱり小樽ってイメージがすごくいいんですよね。
- **藤井委員（総連合町会）**：受け入れ体制なんですよ、やっぱり。いいお店で美味しいものを食べたら、今度一緒に行きませんか、どれ行ってみようかって話になりますよね。そうい

うものをできるかどうか、ですよ。

- **阿部委員（政策金融公庫）**：そうですね。ですから、移住前の段階と移住して来た後にはこのミーティングあります、ということで、これは後のほうですよ。
- **藤井委員（総連合町会）**：エモーションというか、感情を呼び覚ますような仕掛けみたいなところまでやっていかないと、人って来ないんじゃないですかね。ただ、1万円のものを5000円で小樽で買えますと言っても、移住して来るわけではないですから。やっぱり感情揺さぶるだとか、そういうところまで掘り下げてやっていかないとダメなのかな、と思いますね。働く場所がなかなかないのでね。いや、所得がある程度の仕事ってという意味ですが。であれば起業するマインドの人に、来てください、と。先ほど話したように、観光の1等地で仕事ができますよ、電気光熱費は実費でもらうけど、あとはもうすべてタダですよ、と。ただし、子どもたちのための学びの教室を年に3回やってください、とか。そういったことを世界に発信すれば来ると思うんですが。私はいつもそんな妄想をしております。
- **鈴木座長**：これサポートセンター開いてまだ1週間ぐらいなんですか。もう問い合わせはありました？
- **事務局（松尾主幹）**：今まだ1週間で、来週14日の日に打ち合わせなんでちょっと今日時点でどういう状況かはわからないですが、常に会議所の方には相談があると思います。起業したいという相談だけでも、年が明けてからもずっとあると聞いていますので。
- **藤井委員（総連合町会）**：東川町に人が来るのはやっぱり、魅力ある受け入れ体制というか、そういった何かがあるから来るんでしょうね。何か深掘りしてやらないと、窓口やるのはいいんだけど問い合わせは多いけど、実際は移住して来ないっていうのではね。だから、そこから辺の仕掛けみたいなことは、もっと何かできると思うんですよ。
- **鈴木座長**：東川とか、後志では余市あたりになるのかな、いわゆる年金生活者、その人たち

は結構選ぶ町なんですよね。暮らしやすいところがあって、家賃も安いし、水道料がかからないっていうのが確かにありますし。出て行くお金がすごい少ないんですよ、東川の場合には。そういった意味で年金生活者には非常に公的な恩恵があって。私はいとこが年金生活者で東川に住んでいますけど、やっぱり暮らしやすいと言ってましたね、実際。

- **栄森委員（北海道銀行）**：伊達とかも言いますよね。雪が少ないこともあるでしょうけど、住みやすいでしょうね。
- **鈴木座長**：ああいう路線を小樽が選ぶべきかなと思ったらちょっと。あれは違うかなという気が私はしてるんですけどね。
- **藤井委員（総連合町会）**：小樽の人口増えても高齢者ばかり増えるなら、ちょっとそれも難しい問題だなと思っていて。どちらかというとなって欲しいのは子育て世代で、子どもたちがキャッキヤ騒いでっていう、ああいう世代に来て欲しい気持ちがありますよね。高齢者がどんどん増えた場合は医療費がかなりかかってくる恐れがあるし、などと思ってしまうんですよ。
- **高橋委員（中小企業家同友会）**：その意見ですけどね。それはやっぱりちょっといびつな考えだと思いますよ。高齢者も購買力ありますし、お孫さんが来たり何だりしますからね。だからそういう考えは持たないほうがいいと思います。
- **藤井委員（総連合町会）**：いや、高齢者の方だけが集まるっていうのは、新たな懸念があるのではないかと。それが駄目だって否定はしていません。
- **高橋委員（中小企業家同友会）**：人が集まってくれば誰でもいいんです。早い話が、赤ん坊でも高齢者でもいいです。人が来てくれるとそれだけ購買力ありますから。
- **藤井委員（総連合町会）**：子育て世代の人をもっと引っ張るっていうことを中心にしないと。全世代に万遍なくやるのもいいですが、それなりの深掘りしたところにガツンと予算を投入

するとか、集中と選択みたいなこともしていけないといけないのでは。人もお金もなかなか限られるところでは、そういうことをやっていくっていうのも必要なと思います。

○ **鈴木座長**：はい、どうぞ。

○ **小原委員（公共職業安定所）**：さっきちょっと高齢者の話が出たので、少しずれるかもしれませんがお話させてください。ハローワークでパートタイムを希望している高齢者の方が非常に多くてですね、仕事を探している全体の6割ぐらいの方が55歳以上の方なんですけども、元気な方が多くて、シニアパワーと言いますか、もっとやりたいっていう方も結構おられます。このシニアパワーを人口を増やす、減少を抑制するのに何か役立っていただくことができないかと思っております、例えば子育ての支援に対して、過去の会議でも出たかもしれませんが、子育て支援の施策の中にシニアパワーを何とかこう融合させて、できないだろうかというようなことをちょっと思っております、もちろん仕事の紹介はハローワークがさせていただきますが、しっかり働くという前段階でこういう支援だったらできるよとか、たとえば放課後児童クラブの送迎のところだけちょっとやってもらうだとか、ちょっと留守番してもらおうとか。多分こども未来部かどこかの部署で担当されていると思いますが、ファミリーサポート事業というのをやっていると思います。他の都府県ではシニアパワーをかなり全面に出して事業をやっているところもあると聞きます。子育て支援に高齢者のパワーを借りてやる、企業誘致とか財政出動しなければならないことは、なかなかすぐにできない部分があるので、今ある資源でできる方法ということで、何かそういう融合した取組みみたいなことは今までやってこられなかったのかなと思っております。

○ **藤井委員（総連合町会）**：シニアパワーっていうと町会はまさにそのとおりなんですよ。80歳以上の町会長が3割以上ですから。70歳以上が5割以上。昨日も今日も、もう辞めたいだとか、そんな相談も実はたくさんあって、なだめるのが大変なんです。そういった町会

はそのあとの後継者がいないんですよ。昨日相談あった会長も 90 歳で、その後継者がいないんです。だから僕も、この間市長とお話しする機会があって言ったんですが、今の町会活動やってるのは 80 歳以上とかそういう人ばかりで、今の人が続けられなくなったら、もうその後ろに継ぐ人がいないですよ、と。そのときどうするんですか、いう話はさせてもらったんです。ただ、今のシニアパワーというお話で、今町会やっている人達は確かにすごいシニアパワーですよ。僕も 68 だけど、まだまだ若い部類に入っていて、80 歳以上の人が頑張ってるので、自分なんか年齢を理由に引退したいなんて言えません。だから、シニアパワーについては町会活動については目一杯発揮してもらっているんです。後継者がいない、そこら辺が一番の課題かなと思っています。小原所長のお話を聞いて、子育て支援などうまく結びつけるところがあればいいのかな、っていうことはちょっと思いました。

- **小原委員（公共職業安定所）**：特に 50 代 60 代ぐらいの方だったら、早ければおじいちゃんになってるかもしれませんが、まだ十分お元気ですし、車の運転もしますからね。
- **藤井委員（総連合町会）**：ただ、今は役所も定年延長する時代だからね。皆ガンガン働いてるんで、町会活動って言ってもシニアパワーの活用手段が難しいという部分はあるのかなって気はしますね。そこはどうやってマッチングするか、ですよ。
- **鈴木座長**：そういう方々に今、十分仕事は提供できていないような状況なんではないでしょうか。
- **小原委員（公共職業安定所）**：パートの求人の比率は全道より小樽は多いんですが、やっぱり若い方がターゲットですよ、会社さんにとっては。堺町通り見てもそうですよね。だけれどもパートを希望してる方々というのは、さっき言いました 6 割は 55 歳以上の方、若い人は小樽市内ではなく、どちらかというと、さっきも出ましたけど、仕事の種類が多くて賃金もいい札幌のほうに流れていく形になるので、ちょっとその辺はミスマッチになってるんです。さっき言った高齢者の求職者が多い、特に女性が多いんです。パート・アルバイトで

働いてきた女性という、その力を活用できないかと考えています。私も転勤族ですが、生まれも育ちも小樽なんですね。やっぱり長年住んできて、単身赴任でいろんな地域に行ってますけど、やっぱり小樽のシニア層の方は元気な方が多いので、何とかその力を生かされればいいなと思っています。

- **鈴木座長**：これも企業にもね、参画してもらって。企業をそういう意味で支援するというような施策があれば、よろしくお願ひしたいですね。シニア層を雇いやすくなるような。はい、どうぞ。
- **杉山委員（ホワイトウイング）**：質問なんですけど、前回っていかもう去年になるんでしょうか、書面開催時の資料に、少子化対策は他の道内の市町村と争っても、もう頭打ちになる、消耗戦に陥ってしまう、っていう書き方がされていて、私はそれがすごく引かかるといふことで、その時は書面で出ささせていただいたんですけど。もう、小樽市としては、それでひと旗プロジェクトっていうのにこう力を入れていこうっていうような感じの書かれ方をされたんです。小樽としては、少子化対策の方よりも移住に、どちらかというとな舵を切るといふふう考えたほうがよろしいんでしょうか。それは、絶対10ゼロではないとは思いますが、その割に市長さんはすごく子育て・少子化にもう全面に力を入れてくんだっていうのを確か聞いた気がするんですけども、そこら辺の私の中の何かこう、どっちなんだろうっていうような感じが、どうしてもいつもしてまして。
- **事務局（齊藤室長）**：やはり人口対策って、今いろいろご意見出ましたけれども、子育て施策だけやれば人口増えるかというのと、やはりそれだけでは駄目で、かと言って職場だけの話かというところではない、やっぱりバランスがありまして、すべてが大きく絡んでまして、子育て施策をやることによって、生み育てやすいということ、若い世代が増える。だけど来たけれども働く場はどうなんだということ、やはり、仕事の部分、雇用の場の創出という

のも非常に重要と考えてます。またさらには、よそから人を呼び込むため定住だけでなく移住を促進するために移住対策という形で、やっぱり仕事と子育て、移住というのを今ちよっと三本柱で人口対策、特に社会減対策としては大きく考えておまして、それを、やはりすべてに力を入れてバランスよくやっていかなきゃならないなという思いでいるところがございます。

- **事務局（松尾主幹）**：ちょっと答えになっていないところがあると思うんで補足ですが、その質問の答えってというのが、そもそも何かって言うと、子育て世代の移住に向けてよそのまちみたく補助金を出しなさいっていう意図の質問だったんですよ。一番最初のその答えになる前段が。なので、今南幌町なんて特に札幌近郊で人口増やしてるんですけども、子育て世代きたら1件100万円とか配ってるんですよ。宅地タダであげますとかっていうことをしてるんですよ。小樽は毎年転入だけで2000件とかあるんですよ。それに100万ずつ、その半分が子育て世代で100万ずつ配ってしまったら破綻してしまいますよね。そういう中で消耗戦になってるっていう書き方の回答になってるかと思います。その次にひと旗プロジェクトのことなんですけど、ひと旗プロジェクト、子育て世代に移住をしてくださいって言ったときに、やっぱり今回このサポートセンター作ったのも、まず働く場所、仕事なんですよ。ただその取り急ぎ喫緊でこういう給料の高い仕事がありますっていうのをアピールすることができない、でも移住者を呼び込みたい。小樽っていう町は、過去の歴史からいくと起業するチャンスはあると。なのでひと旗プロジェクトっていうものを立ち上げて、起業を目指す移住の方をまず小樽に呼び込もうというので「ここがひと旗あげる場所、小樽市」っていうスローガンのもと、ひと旗プロジェクトを始めました、と。

- **藤井委員（総連合町会）**：これは僕すごくいいと思うよ。

- **事務局（松尾主幹）**：で、それを始めて、今年度になって、ひと旗サポートセンターって

うのを作りました。起業される方ばかり待ってても仕方がないので今度、こういう仕事がありますよ、こういう仕事であればありますよっていうのを、サポートセンターで情報発信していきたい。今まで私たちが何をやってきたかっていうと、仕事はありますかって言われたら、ハローワークのホームページを見てください、と。雇用の掘り起こしみたいな、ハローワークさんも一生懸命やられてるんですけども、私たちはなかなかそこまで手が回らなかったんで、商工会議所さんには無料職業紹介所っていう届け出まで出してもらって、紹介できる体制を作りました。結構小樽って縁故採用みたいなものが多いんですよ。こういう人欲しいんだよね。でもなかなかいないんだよねって。でもハローワークに求人票を出してまで、雇うかって言ったら、うーん、いやいい人いたら雇うんだ、みたいなものが多いというふうに聞いてたので、そういったものの掘り起こしも含めて、今度そのサポートセンターでお仕事の情報も、普通のお給料をもらえるお仕事も、会員さん企業であれば紹介できるようにしたいっていう流れで、去年からずっとその流れできています。そして、移住っていうのは新聞に出てるとおりパイの奪い合いです。パイの奪い合いで、お金を出しているところはもう子育て世代に100万出すとか、子ども1人に100万円出します、何を出しますっていうのをやってます。小樽も一応そういう補助金を出してます。首都圏から移住されてきた方については移住支援金という形でお金を出してるんですけども、その補助金も今小樽は出せない状態になってます。なぜかというとその周りの町村との奪い合いで、小樽に移住される方にまで北海道の予算が回ってこない、っていう現状があって、令和4年度分は募集停止してます。今年度1人、1件は該当になったんですけども北海道全体でそういう補助金を出して移住者の奪い合いみたいな獲得競争が進んでるので、その去年の答えの前段のお答えになっている。どこの自治体もお金があるところは補助金を出せるんですけど、小樽みたく規模が大きくて何人移住して来るかわからなくて、という自治体で1件100万ってとんでもない金額になる

んですよ。なのでやっぱり、小樽の魅力を、ひと旗あげる場所というスローガンをつけて相談する体制を作って、仕事の掘り起こしもしてっていう、なるべく今、お金をかけられないのでかからない方法で、そもそも魅力やポテンシャルはあると思っているので、そういったものを情報発信して移住者を呼び込もうという、そういう形で今、移住施策は進めています。

○ **鈴木座長**：はい。よろしいでしょうか。

○ **鈴木委員（市民公募）**：私も一言よろしいでしょうか。戻るんですけれども、資料の1-2なんですけれども。先日お子さん2人育てている若いお母さんとお話してですね。その際に小樽市への要望とかありませんか、困ったことはありませんかと聞いたんです。そうしたら、ベビーベッドのあるトイレがないってことを言っていました。あるのはウイングベイと、それから運河公園。日本郵船旧小樽支店のあるトイレですね。そこにあるけども、例えば長崎屋とかにないんだということ言っていました。それでそういう方の目からですね、この1-2の資料なんか見ますとですね、3番目の「若い世代の妊娠・出産・子育ての希望をかなえる、未来の創り手を育む」これが市の①の目標達成が5個あるということですね、そういう方の目から見たら、こういう資料は何だろうと思うんですよね。誤解を生むのでは。それで3ページもですね、やはりこの基準値がやっぱりちょっと問題じゃないのかなと思う。4ページですね。例えば「子育てがしやすいと感じている市民の割合、18歳未満の子どもがいる世帯」で、その22%ですよ。だから、5人に1人の子育ての方が、大体いいなと思っていけばよしとしましょう、ということですよ。これはやっぱり目標が低すぎると思うんですよ。やっぱり50%じゃないでしょうか。そういう具合にしますと全部①のBばかりになってですね、これはちょっと、見た目によくはないということもありますけれども。やはりその辺はもうちょっと基準値を検討していただかないと。やっぱり5人に1人がよしとしてればいいんだということは、いかななものかなと。そういう印象は持ちました。

- **事務局（齊藤室長）**：先ほど言いましたように、これから総合計画のその中間見直しというのをやる予定になっておりますので、その中で基準値、特にやはりこの子育ての部分が高いというのは、我々も承知しておりますので、ここの部分、どういう数値がいいのかも含めて検討させていただきますし、それと併せて、やはり子育て支援策、今市長もかなり力を入れるということで今年度予算も令和5年度予算も含めてですね、子育て支援策をできるだけ力を入れていきたいという思いを持っておりますので、そちらの方向については、きちんと進めていきたいと思えます。
- **鈴木座長**：はいよろしいでしょうか、それではですね、次の議事4に進めたいと思えます。次はデジタル田園都市国家構想についてということでございますけれども、この構想について事務局よりご説明をお願いします。
- **事務局（松尾主幹）**：資料の4-1、資料の4-2でございます。これにつきましては今、報道等で流れているとおり、岸田政権がデジタル田園都市国家構想というものを進めております。デジタルの技術を活用して地方創生を図りたい、ということで、今、総合戦略を作っている根拠がこのデジタル田園都市国家構想というものに、今年度置き換わる予定になっております。ですので、会議の冒頭で、この戦略の見直しが必要になるかもしれませんという話をさせていただいたんですが、最後に皆さんからご意見をいただく時間を取りたいので、この内容について、国の流れの説明をするのは省略をさせていただきたいなと思うんですが、基本的に、地方に仕事をつくるですとか、人の流れをつくる、結婚・出産・子育ての希望をかなえる、魅力的な地域をつくる、地域の特色を生かした分野横断的な支援を行う、これは今の既存の総合戦略と何ら変わりはありません。この課題を解決するためにデジタルの技術を活用していこうという流れになっておりますので、DX、デジタルの活用の部分について総合戦略の見直しが今後必要になるかもしれないという流れだけ、今回皆さんに説明をさせて

いただきたいなと思います。細かい中身については難しい言葉でたくさん書いているんですが、これまでの地方創生の流れを汲んで、さらにデジタル技術を活用して進めていきましょう、というのが今の大きな国の流れとなっています。そのように認識をしていただければなと思います。説明については以上です。

- **鈴木座長**：はい。デジタル田園都市っていうのは、初めて聞いたような気もするんですけども、新聞報道などありましたかね。はい、これにつきましてご質問等ありましたら、お願いいたします。
- **藤井委員（総連合町会）**：質問ではないですけど、さっきも言ったんですが、国のこういう補助金などを活用して、逆提案するぐらいの魅力ある企画をして、国に補助金を作らせるぐらいの意気込みというのかな。こういう補助金の制度にしたほうが、本当の地域創生になります、というような。これはちょっと理想論的すぎるかもしれないですが。いろんなことを小樽でやろうとしたら、それなりの財源が必要ですから。それを自前でやるっていうのは、1回や2回は出来ても、5年10年となると無理ですから、こういう国の制度は活用してやって行って欲しいな、と思います。
- **佐藤委員（北海道新聞社）**：すみません。これに向けて総合戦略が改定される可能性があるっていうお話ですよね。改定されるとしたら、タイミングとしては、来年度、新年度のいつぐらいでしょうか。
- **事務局（松尾主幹）**：それがまだ国の方もはっきりしていないものですから、今のところ何とも答えようがないというのが正直なところです。
- **佐藤委員（北海道新聞社）**：国がはっきりしてからそれを受けて、改定が必要かどうかという作業に入る、と。
- **事務局（松尾主幹）**：改定するかどうかは、それから判断したいなと。国が「（地方自治体

も) 改定してください」という方向性を出したときに、じゃあ何を改定するか、という確認をしたいなと思っています。

- **佐藤委員 (北海道新聞社)** : 結構時間かかるってことですね。
- **鈴木座長** : デジタル推進っていう取り組みが始まっているんですね、
- **事務局 (松尾主幹)** : 一応これについてはもう去年から。
- **鈴木座長** : 去年から始まって、デジタル推進委員は2万人ですから、かなり小樽にいますかね。聞いたことが無いので、いないんじゃないかという気もしますけどね。それとデジタル推進人材。これもデジタル推進人材とはどういう人材なのかっていう定義は全くないんです。IT人材というのはずっと言われてきたんですが、それとは別に、職業訓練でそういう講座を作ってそれを受けた人間がデジタル推進人材の定義なのかもしれませんけどね。
- **高橋委員 (同友会)** : すいません。時間押しているんで、決まっていない問題を、今あれこれ言っても仕方ないと思うんで、次に議事進行して欲しいと思います。
- **鈴木座長** : これは質問ですので、あれですけども。他、何かご質問ございますか。よろしいですか。それではですね、議事の5番の小樽市の人口推移についてでございます。これは報告に近いと思いますけれども、事務局の説明をお願いいたします。
- **事務局 (松尾主幹)** : 本当はですね、グラフに基づいてゆっくり説明をさせていただきたいなと思ったんですが、時間も押しておりますので、資料の5-1に特徴的なことをまとめたものを作りましたので、これで説明をさせていただきたいなと思います。人口というのは年末締めになっておりますので、令和4年12月末人口でいけば10万8525人。前年と比較いたしまして1885人減っております。昨年度の人口の動態っていうのは、これまでの人口の動態から言うと特徴的なことばかり多い1年間でした。ですので、その特徴について太字で書かせていただいております。令和4年の3月末の人口で人口11万人を割る形となりました。

た。自然増減が増加しております。これはなぜかという出生数が初の400人割れ、昭和42年には3268人、ピークだったものが400人を割れて、385人となりました。これについては前年比30人の減となっております。死亡者数については2047人、前年と比べて72人増えております。これについても、初めて亡くなられた方が2000人を超えたという状態になっております。自然減については通常、自然減1500、社会動態500ってというのがこれまでの人口の推移だったんですが、今年度については自然増減が1600、社会増減が235という形になっております。先に社会増減のお話をしてしまったんですが、社会増減はマイナス235人、前年度と比べて229人減っております。これについては転出数については3473人で、転出も増えています。前年度比べると144人増えています。転入数は3238人、これも昨年と比べると354人増えております。どこからが増えてるのかという分析をすると、外国人が92人増えています。あと関東圏以外の道外、関西ですとかそういったところから95人、今回については転入が多い傾向となっております。これは全道的な傾向と全く同じ傾向となっております。次に年齢ごとに転入と転出の状況を見ました。年少人口、0歳から14歳までの方についてはすべての年齢区分で社会増になっております。生産年齢人口については15歳から29歳。要は学校へ進学するですとか、進学する、就職をするっていう年代については社会減となっております。その他の30歳から64歳までの区分については社会増となっております。30歳、子育て世代の転入が増えてきているのかな、というふうに認識をしています。65歳から90歳超えの部分についてはすべての区分で社会減となっております。これについてはその他の会議などでも言われているのが、雪が大変なので札幌だとかそういうところに転出するだとか、そういう話がよく会議の中では話題となって出ております。地域区分ごとの転入数の状況につきましては、札幌へ転出超過が513人、前年度と比べると76人増えています。平成30年以来、札幌との社会減の差が縮まってきていたんですが、昨

年につきましては、社会減が拡大をしたという形になっております。外国人についてはプラス 92 人入ってきています。転入者が 209 人で、転出が 117 人。前年度と比べると、157 人増えております。外国人の転入が増えた理由については、外国人技能実習生による転入が昨年 96 人。この方々は長くて 3 年間いらっしゃるんですけど外国人技能実習生による転入が 96 人と、どんと増えたという状況になっております。町別の人口の推移については人口増は、新光町が 77 人、星野町が 43 人、張碓町が 34 人の増となっております。人口が減っている地域で見ますと、桜 1 丁目から 5 丁目 が 262 人減っています。長橋 1 丁目から 5 丁目 149 人、奥沢 1 丁目から 5 丁目 が 116 人、緑 1 丁目から 5 丁目 が 101 人減っております。この減った内訳が自然減なのか社会減なのかというのは今これから分析をするところでございますので、今のところ速報みたいな形で町別の人口の推移について説明をさせていただきました。この文字で書いてあることと、グラフと突き合わせできるようになっておりますので、後程もう一度ご覧いただければと思います。説明については以上です。

- **鈴木座長**：はい、それではただいまの説明についてご質問等ございますでしょうか。
- **藤井委員（総連合町会）**：時間がないところ申し訳ないんですけど、人口の方で新光町が増えているというのはやっぱり、札幌の星置はもう土地がなくなって、だんだん小樽側の星野町に押し寄せている、家を買ってるっていう話を桂岡の人たちから聞いているんですが、そういうことの一環というふうにとめていいんでしょうか。
- **事務局（松尾主幹）**：事務局の分析と言いますか、考え方としては、札幌の地価、土地の価格が急激に上昇をしています。それを受けて星野町の住宅用地と新光町の住宅用地に子育て世代が転入してきているっていう状況にはあります。ただ昨年の状況、もう 1 年前で見ると、これより多い人数が入ってきていましたので、建築確認申請の件数ベースで見ると、もう星野町と新光町についてはこれ以上家が建つ場所がないのかなっていう状況になってきて

ます。

- **藤井委員（総連合町会）**：絶対的なね、土地の残りがね。
- **事務局（松尾主幹）**：市議会の中でも答弁させてもらっているんですが、やっぱり札幌市内で家を買えない方、高くなってきていることにより買えない方が、札幌近郊の交通利便性のいい地域を中心に、子育て世帯で入ってきてる方々はあるという傾向は掴んでいます。
- **藤井委員（総連合町会）**：これ、銭函とか桂岡とかでも土地はあまりないんですか。受け入れたいけども、そもそも土地が小樽的には。
- **事務局（松尾主幹）**：銭函・桂岡については、それは課題だになっていうふうな認識でいます。これから、このままいくともう入ってくる場所もありません、社会減が広がりますっていう形になってくるかと思うので、そういう潜在的な札幌の方の家を建てたいという需要にどうこたえていくかっていうのは、今後の小樽の課題なんじゃないのかなというふうな認識をしています。
- **藤井委員（総連合町会）**：これは桜とか望洋台とかにね、来てくれればね、いいのかなっていう思いはあるけど。
- **鈴木座長**：銭函にスペースはあるんですか。
- **事務局（松尾主幹）**：星野町についてはもうほぼありません。銭函は建ったり無くなったりしている感じです。銭函単体で見ると、札幌の方が張り付いてるっていうイメージはそんなにないです。逆に銭函へ賃貸の住宅がいっぱい建ち始めてるような状況です。1LDKで12万円とか、8万円、9万円とか。
- **藤井委員（総連合町会）**：おしゃれなお店が出来てきて、とかいう話聞きますよね。そういう需要があるのかな。
- **鈴木座長**：JRの状況がよくなれば銭函ってのはかなり見込みがあるような気はしています。

- 藤井委員（総連合町会）：それもありますよね。JRがかなり。
- 鈴木座長：他にございますか。よろしいですか。それではですね。最後に、ご意見ご質問を含めまして、委員の皆様からご発言をいただきたいと思います。人口対策、地域創生についてそれぞれの分野に関連いたしまして、各自において特に重要と考えていることがございましたら、手短にお一人1分ぐらいですけれども、ご披露いただければと思います。それでは、こちらのほうから回っていければと思いますけれども、まずは加藤委員お願いします。
- 加藤委員（北海道財務局）：はい。それでは、手短にお話しさせていただきます。小樽は札幌と通勤通学が可能な地域にあるということが、非常に難しい点かなと思っております。パイの奪い合いというお話もありましたけれども、やはり札幌に通勤できるという優位性を効果的に活用する。あとは空き家の活用も併せて、お考えになったらどうなのかなと思います。具体的に言いますと小樽の若者が札幌へ出るというのは、ある意味、致し方ないのかなと、防ぎようがないのかなと思っております。そういった方たちが札幌で就職をし、結婚して子育て世代になったところをターゲットに、空き家を提供して、住んでもらうというのはいかがでしょうか。というのは、札幌の若い方は、手狭な賃貸マンションとかアパートに住んでいるんですね。小さいお子さんがいると、隣近所への騒音・苦情に相当気を使ってらっしゃる。ですので、需要は私個人的にかなりあるんじゃないかと思います。別に古くてもいいですね、子どもは汚しますので。好きに使ってくださいという形で、一戸建てを提供すれば、家賃の問題もありますけれども、一度小樽に戻ろうかということはあるんじゃないかと思えます。そこでお子さんが大きくなって、その地に根をおろせば、ここでずっと永住するかっていうこともあるかもしれませんし、そういった層にターゲットを絞って、広報活動や誘致をするということも必要かなと思います。
- 鈴木座長：はい。ありがとうございました。では、次は小原委員お願いします。

- **小原委員（公共職業安定所）**：はい、では手短かに。先ほどちょっとお話したんですけれども、わたくし転勤族で転勤先でいろいろ挨拶して、出身どこ、と聞かれて小樽ですと言うと、小樽いいまちですね、と言われます。そうですね、30分以内にスキーは行けるし、海水浴も行けるし、歴史的建造物の観光地も行けるし、ちょっといろんな物を買いたければ札幌にもすぐに行けるということで、いろいろ地元をPRしているところですけども、今まで以上にそういう小樽のよさ、地元に住んでいる者もやっぱりいいまちだと思っていますので、今まで以上に周知広報をしていただければと思います。以上です。
- **鈴木座長**：ありがとうございます。続きまして、見延委員をお願いします。
- **見延委員（商工会議所）**：はい、わたくし商工会議所の方から出席させていただいております。この商工会議所としましても、様々な創業支援であるとか商工業の振興ということで行っているようなプロジェクトをやっております。その根っこの部分には常に人口問題っていうものは存在しているのかなというふうに思っております。今回、ひと旗サポートセンターということで事業化されておりますので、それがどういうふうに機能していくのか、自分としては楽しみにしているところであります。以上です。
- **鈴木座長**：ありがとうございます。続きまして、高橋委員をお願いします。
- **高橋委員（同友会）**：はい、同友会を代表して来ております。それで人口増やそういう会議に対してですね、僕は、もう人口を増やさなくてもいいんじゃないか。もうどんどん減ってる、これ以上減らさない方法を考えたほうがいいんじゃないかと考えています。これは2021年9月20日の道新さんの記事なんですけど、これは愛知県の新城市っていうところの市長が書いているんですけど、地域の人口増も目指さないと。もう、今いる市民の人たちが充実した環境を作ったほうがいいだろう、という意見が載ってます。これは道新さんの、ちょっと2年前、1年半前で古いんですけど、ただ、こういう考えもですね、やはり持ってい

ってもいいんじゃないかと。今僕が考えております。以上です。ちょっと用事があるんで申し訳ないんですが、遅く来て早く帰りますので、申し訳ありません。失礼します。

- **鈴木座長**：はい。続きまして阿部委員お願いします。
- **阿部委員（政策金融公庫）**：今日お話を伺っていて思ったのがですね、どういう形での人口増を目指しているのかということについてですね、やっぱりもうちょっと市民の皆さんでコンセンサスが必要なんじゃないかなと、ちょっと感想として思ったんですが、外国人の方を増やしたいとかですね、若年人口を呼び込みたいのか、いや高齢者の方でもいいのかとかですね、どういった形での人口増を目指しているのかというのを、もうちょっと意見のすり合わせがあればですね、それに対応してどういった施策を打っていくのかっていう整理が出てくるのかな、というふうに思いました。もし若年層呼び込みたいんだったらそういった銭函あたりに、例えば宅地造成してベッドタウンを作って、札幌への通勤圏を作るっていうのも手になってくるでしょうし、高齢者の方を呼び込むっていうことであれば、今ちょっと人口が減っている海の方ですね、そういったところに対しての家賃補助を何とかですね、いろんな方法も出てくるでしょうし、どういった形で人口増を目指していくのかというのを、ちょっとお話したほうがいいのかというのも感想でございます。
- **鈴木座長**：はい、ありがとうございました。では次に佐橋委員お願いします。
- **佐橋委員（北洋銀行）**：はい。小樽市の場合はですね、やっぱり規模的にも財源の問題っていうのが非常に大きいとされていて、この規模ですといわゆるコンパクトシティにして経費を削減しながら財源を作るっていうのもなかなか難しい場所だなというふうに感じているんですが、であれば、だからこそなのかな、小樽の魅力っていうのが、吉田委員がおっしゃっていたようにですね、そのまち自体に魅力が増えるわけですから、このまちにお金をかけなくてもこのまちに住みたいっていう人がたくさんいるはずですので、そういう人たちをど

う呼び込むかっていうことになろうかと思います。そこは私さっき申し上げましたが今、阿部委員もおっしゃってましたけども、札幌に勤務してる人を小樽に、若い世代に住んでもらって小樽で子どもを産んでもらって子育てしてもらうのがいいのか、いやいや小樽はやっぱり後志の中心地なんだから後志としてやっていくんだっていうことなのか、そこら辺もですね、方向性がある程度つけてあげるとですね、どういうところにお金を使っていくのかっていうのが見えてくるかなと思っています。私も転勤族ですから、3年前まで北広島の支店長もやっておりましたけども、断然小樽の方が住みやすいです。住んでいても楽しいし住みやすいです。私の自宅は札幌の西区にあるんですけども、30分ぐらいでJR乗って来れちゃうんですけども、住みやすいんで、うちの嫁なんかも週末よくこっちに来るんですよ。ですから本当にそういう魅力的なまちで、住んでいると本当に魅力的なところなので、起業家を増やすこのお手伝いも我々もさせてもらいますけども、移住者、テレワークの人でもいいし札幌から通える人、札幌に帰る人でもいいし、札幌に通う人っていうのは当然若い世代が中心になってくると思うので、そういう人たちの人口を増やすっていうことも、人口対策という面に焦点を合わせれば、必要なことなのかなというふうには思っております。はい。以上です。

- **鈴木座長**：ありがとうございます。それでは、栄森委員お願いします。
- **栄森委員（北海道銀行）**：はい、ちょっと私は全体というよりは個別の話で、こんな話ここでしていいのかどうかって考えたんですが、数ヶ月前に北海道新聞さんでもうすでに報じておりますので、オープンになってるんでいいと思うんですけど。ウイングベイ小樽さんですね、ここを私どもも取引いただいて管理している小樽ベイシティ開発さん、社長さんともよくお話するんですけども、いろいろお話を聞いてると、あそこって今ファンドというところが持っていてですね、従業員さんが2000人働いてるって言ったかな、そういうふうに聞い

てるんですよね。仮にこれが海外の投資家とかがあそこを買ったと、仮にですが買ったとなったら、本当にちゃんと運営するのかわからないのか。日本なんていうのは、割安に思われていますから、海外の投資家からすると、安いねって買っちゃうかもしれないんですけど。本当に運営してくれるのかっていうのはこれまたわからない話で。テナントも撤退するかもしれない。いろんな問題があつてですね。あと、胆振東部地震があつたときには確かあそこはブラックアウトのときは自家発電を持っているんで、避難所的な感じで一つのインフラとしても活躍した場所です。先ほど雇用を守るとかいろんなお話があつたんで、その2000人が、もしあそこが雇用を守るとするとですね、今いろんな小樽市さんと固定資産税のいろんなお話を多分されてると思うんですけども、これももう新聞記事になってるんで話していいと思うんですけど、そこら辺をですね、本当に柔軟に小樽の非常に大事な位置付けの場所だと思いますんで、そういう柔軟な発想でぜひご対応いただけたらいいなど、ちょっと個別事象になってしまいましたけど、思っております。はい。

- **鈴木座長**：はい。ありがとうございます。では続きまして杉山委員をお願いします。
- **杉山委員（ホワイトウイング）**：はい。いろいろ質問させていただいたのであまりないんですけども。小樽の人口が年々2000人、定期的ぐらいな感じで減っている、ということ、私はもうちょっと出生率が上がれば解決するのかな、あと転出していく人が多いからそうなるのかなと、とらえていたんですけども、実はやっぱり自然減が多いんだっていうのに、改めて気づかされて。それは小樽の高齢化率にも関係しているんでしょうけど。そうすると、この2000人減はもしかしたら、小樽の宿命なのかなとも思い始めています。でも、もう私もどちらかというところこれ以上減らないで欲しいっていうのが正直なところで。増やしていくよりもこれ以上減らないようにして、今住んでいる人の満足度とか充足度を上げていくのも、人口対策の一つになるのかな、なんていうことを、おぼろげにちょっと考えだし

ました。ちょっと前なら、もう減らさないで、もっともっと呼び込んで、もっともっと人を増やして欲しいというふうに、個人的には思ってたんですけども。少しパイの奪い合いっていうふうにおっしゃってた方もいますけど、日本自体がそういう、もう人口が減ってきている中で、考え方を少しく柔軟にしていく必要があるのかなっていうのを、市役所さんとかもいろんな資料から導き出して、いろんな柱を立てて少しずつでもやっていこう、っていうことなんだなあということを改めて勉強させていただきました。はい。

○ **鈴木座長**：ありがとうございます。では次に藤平委員お願いします。

○ **藤平委員（退職校長会）**：はい。小樽には、退職したあとに住みたいって人がいるんです。公務員関係が多いんですが、私の知ってる範囲でもやっぱりいます。私も教員だったものですから、転勤で後志管内を回り、最後は小樽で住みたい、という方のお話をよく聞きました。さっき高齢者の問題などいろいろ出てきましたよね。やっぱり安定した生活ができるというところに、小樽の存在があるんじゃないかなと、今お話を聞いていて思いました。今言われていましたように、文化面ですとかそういう面もあるんですが、子育ても含めて、高齢者の方の力を活用するっていうお話ありましたけれども、60代、70代でも皆さん頑張って働いていますので、そういう面にも目を向けていただければなと思いました。まず小樽のいいところをアピールしていくと。そういう面では、先ほども言いましたが、新聞の記事もそうですし、こうやって取り組んでいることはどんどんアピールしていくことが、周りの人たちにとっても、大きくやっているなっていう意欲になってきますので、その辺は大切かなと思います。

○ **鈴木座長**：はい、ありがとうございます。それでは藤井委員お願いします。

○ **藤井委員（総連合町会）**：人口については私はすごい悲観論者です。何をやっても年間2000人減っていくと思います。ですから、杉山委員もおっしゃったように、僕は人口対策ってい

うのは人口減少に歯止めをかけるというのも一つあるけれど、縮小した小樽のまちの中で、いかにまちを活性化して、住みやすいまちを維持していくか、むしろそっちの方に重点を置いたまちづくりをすることのほうが大事ではないかと、何十年も前からそういうふうに思っています。それからもう一つ、今言ったシニアパワーのこともあるんですけど、やっぱり日本全体で人口が減っているんで、小樽みたいなどころの魅力を本当に感じてくれる人、多少の不便な面があっても、それを踏み越えて小樽に住みたいっていう人に来てもらいたいので、そのための受け入れ体制を作っていくのが本流であるし、小樽の本道かなと私は思っています。ホームページを立ち上げたとか、いろんなことを今、市と商工会議所さんがタイアップしてやっていますし、いろいろお話聞かせてもらおうと、まだ展開していく余地といいますか、伸びしろのあるまちだなと思っているので。いろんな団体さんと組んで頑張ってもらいたいなと、エールを送りたいなと思いました。以上です。

○ **鈴木座長**：はい。では次に佐々木委員をお願いします。

○ **佐々木委員（連合小樽）**：はい。まずはこの度立ち上がりました、ひと旗サポートセンターが小樽市の人口増・起業増に向けた大きな拠点をなるべくそういった活動が展開されることを期待したいと思います。衣食住という言葉がありますが、私の方ではこれを読み替えて、衣は医療の「医」、食は働く「職」、加えて住むということの「住」、安心して働ける、安心して暮らせるという条件・要素を大きな柱に据えて、よく論議をするんですけど。

「医」「職」「住」、これが安定していれば、私自身もまちに診療所が1軒しかないような小さなまちに生まれ育った者が、小樽に来まして大変病院の多いまちだというふうに感動したところから、今定住して40年以上になるところなんですけど。長く暮らしておりますと、やはり小樽に住んでいながら、先ほど委員の皆さんも小樽市外から入って暮らしてみても、住み良いと言って暮らしていただいておりますし、このたび移住してきた方々のミーティング

の場でも、やはり小樽に何らかの大きな魅力があるんだなっていう辺りは、地元で長く暮らしている地元で生まれた人には、なかなか感じない、見つけることができない魅力が、やはりまだまだ小樽にあるんだろう、と。そういうところを発信することで引きつける力っていうものも高めていくことが必要なのかなと。皆さんのご意見を聞きながら感じたところがございます。感想となります、以上です。

- **鈴木座長**：ありがとうございます。では次に佐藤委員お願いします。
- **佐藤委員（北海道新聞社）**：はい、私はマスメディアなんで、やっぱり情報発信にですね、もっと力を入れていただきたいということを言いたいと思います。市のアンケートの回収率が3割で高いなんていう話も、やっぱり市政に対する市民の関心度合いがあまり高くないっていうところからきてるのかなと思っています。せっかく良いことをやってるんだったら、それを周知する工夫をいろいろしていただきたいので。うちは新聞なんで、新聞は最近部数が減ってますけれども、それでもまだまだ力あると思ってますんで、ぜひうちは活用していただきたいんですけど。それともう一つ、市のホームページですね。私いろんな自治体、仕事してますけど、ちょっと大変申し訳ないけど小樽市のホームページって必要な情報がすごく探しにくくって、この「笑になるおたる」ですか、これも今年度の取り組みとしてご紹介いただきましたけど、例えば市のホームページでその移住者を応援する欄みたいなのがあって、これだけ力を入れてるんだったらそこを開いたらその「笑になるおたる」のバナーが、ポンとあればいいのに、どこにあるのか、どこから飛ばばいいのかさっぱりわからない。なので、こんなのお金かけなくても全然できるのでぜひやっていただきたいのと、「笑になるおたる」関連でもう一つ何かユーチューブの公式チャンネルが実はあって、それを昨日発見したんですけど、10月20日ですか、移住者ミーティングの動画が上がってるんですけど、それも市のホームページからどっから飛んだらいいのかもさっぱりわかんなくて。4ヶ月前

に動画を上げてるのにですね、チャンネル登録者数が11名、5本か4本動画が上がってるんですけど、30回再生とか、そんなんで止まってるので、せっかく上げてるのに本当にもったいないなと思って。ちょっと工夫すれば、必要な方に届くと思うので。ぜひですね、そういうところを工夫していただきたいなと思います。以上です。

- **鈴木座長**：はい。ありがとうございます。では次に鈴木委員お願いします。
- **鈴木委員（市民公募）**：先ほど子育て世代の親のことについて発言させていただきましたけども、会議の時間的にもう時間がないなと思ってですね、発言したらちょっと唐突だったなと思って反省しております。人口のことですけども、市の方で仕事と子育てと移住の三本立てでやるということですが、その中でも特に、現に住んでいて子育てをしている、そういう方の身になってですね、細かい施策を実行していただければと思っております。よろしくお願いします。
- **鈴木座長**：ありがとうございました。では最後に吉田委員お願いします。
- **吉田委員（市民公募）**：はい。皆さんと同意見なんですけれども、先ほど新聞報道の話があったんですけど、小樽に引っ越してきてから、小樽後志の地方ページを結構毎日、どうしんデジタルで拝見してるんですけど、小樽の情報がすごい少ないんですよ。
- **佐藤委員（北海道新聞）**：頑張ります。
- **吉田委員（市民公募）**：小樽の記事はもしかしたら他のその地方版みたいところに載っているのかと思ったりするんですけど。他の自治体さんの楽しそうな記事が多くて、小樽の明るい記事があんまりないなっていう気がして、私が小樽に対して厳しく見てるのかもしれないんですけども。やっぱりそれって道新さんと思ってたけど、そこじゃなくて市の方からの情報が出ていないっていうことなのかな、っていう。今お話を聞いて思ったんですよ。高齢者の方が楽しく住めるまち、みたいなアンケートの設問・回答もあったと思うんですけど

ど、やっぱりそういう記事、そういう高齢者の方が生き生きしている記事だったり、子育てもそうですけど、そういったところの情報を出していけばそういう魅力的なまちに見えてくるんじゃないか、と。やっぱり実態がどうあれ、見える空気を作るっていうところは、そういう情報をどう出すかで変わってくると思うので、一つ見出しをどう書くかによって見方が変わると思うので、ぜひもっと明るく情報を出していただきたいっていうふうに思いました。あと私は小樽に引っ越してくるまで、小樽商科大学さんってあんまり存じ上げなかったんですけど、最近すごく学生さんが活躍されていて、いろんな活動を見かけるので、すごいイメージが変わったというか、関心を持っていて、そういう学生さんの活動っていうのもいろいろ知れたら、新聞でも見られたらいいかなというふうに、ちょっと新聞の話ばかりしてしまっただけですけど、そう思いました。以上です。

- **鈴木座長**：はい。ありがとうございました。では本日委員の皆様からいただいた意見につきましては、事務局で改めて整理していただきまして、今後の議論につなげていきたいと思えます。最後にその他ということですが、今年度の会議は予定では今日だけと、本日だけということになるんですが、会議に必要な案件が生じましたら事務局から連絡があるかと思えますので、その際はよろしく願いいたします。また、本日説明のあった資料等を持ち帰ってご覧いただきまして、何か疑問などがございましたら事務局に後日お問い合わせください。他、皆様方から、事務局から何かございますでしょうか。
- **事務局（齊藤室長）**：事務局からですが、本日の委員報償費につきましては、後日口座振込させていただきたいと思えます。振込日につきましては通知いたしますので、ご確認いただければと思えます。
- **鈴木座長**：よろしいですか。それでは以上をもちまして令和4年度第1回小樽市人口対策会議を終了いたします。本日は長時間にわたり皆様ありがとうございました。お疲れ様でした。